

ラウンドテーブル・2014

ニュースレター

2015. 7. 5

生・労働・運動ネット

富山市神通町 3-5-3

TEL 076-441-7843

FAX 076-444-6093

E-mail:jammers@net-jammers.net

「ラウンドテーブル・2014」第13回：

「敗戦／戦後70年」は私・たちの〈問い〉か その6

「『戦後日本と脱植民地化回避の仕組み』再考」(5/10)

での論議から

5月10日(日)、「ラウンドテーブル・2014」の第13回「『敗戦／戦後70年』は私・たちの〈問い〉か—その6」の集いを、表記のようなタイトルで行いました。「その6」では、武藤一羊さんの論文「戦後日本と植民地化回避の仕組み——『日米関係が基軸』ということのもう一つの意味」(「季刊ピープルズ・プラン 2010年秋号」所収)を素材として、さらにそれを補足する他の文章も加えて構成したレポートを、今回報告を行った「生・労働・運動ネット」のメンバーも含めて参加者同士で読み上げるというスタイルで進めました(当日のレポートは、この「ニュースレター」の後半部に収録)。

以下、その報告と当日の「フリートーク」での論議のアウトラインを紹介します。

I. 「脱植民地化回避」のシステムの解体をいかに進めるか——当日の報告から

1. 「脱植民地化回避」による戦後日本国家の〈自己免責〉

この間、「辺野古新基地建設」阻止を焦点として沖縄の「軍事植民地」的状态からの解放を求める非暴力・直接行動の闘いが果敢に展開されています。ヤマトの私・たちが、そうした沖縄の「ピープル」に「応答」するための力の獲得に向けて、戦後日本国家の中に内蔵されてきた「脱植民地化回避」のシステムをいかに捉えなおすかということを中心に大きなテーマとして、今回の報告が行われました。

武藤さんの「戦後日本と植民地化回避の仕組み」の論文では、「脱植民地化」ということをとりわけ重要なキーワードとしています。「脱植民地化」とは、「植民地にされていたピープルが植民地支配下で形成された関係や文化を中から変えていくプロセス」であると同時に、植民地支配を行っていた側自身が植民地支配を放棄し、自らの責任を認めて謝罪・補償を行うことと併せて、植民地支配されていたピープルと新しい関係をつくりだしながら、「植民地支配の中でつく

られた特権的・差別的な制度や文化や思想をみずから批判し、乗り越えていくプロセス」でもあります。

そうした「脱植民地化」のプロセスは「冷戦」体制の成立によって大きく後退することになってしまったのですが、「冷戦崩壊」後も、「植民地主義」は、複合的な世界権力のグローバルな支配の形態として展開されています。近年、過去の植民地主義的な支配・被支配の関係が、本来の意味での植民地がもはや存在しない今日の世界の中で変容されつつ、再生しているという状況を把握するための認識装置として、「ポスト・コロニアル」という概念が唱えられています。そのように、「脱植民地化」ということは、「ポスト・コロニアル」という言葉と対になって、「今日の世界をむしばむ差別や不平等と、1492年以來の征服と植民地化と抵抗の歴史全体をふり返り、グローバルに糾そうとする」ような大きな射程をもつものだと言えるでしょう。

植民地の放棄と「脱植民地化」とは本来、不可分のこととして進められるべきことのはずですが、戦後日本国家は、植民地の喪失がそのまま自らの「植民地支配」の責任を免責するような仕組みの中に自らを置いてきました。その仕組みは、「脱植民地化」のプロセスの不在を意識にのぼらせない社会心理的な機制として働くと同時に、「平和な日本」という自己満足的なく自画像を人々の中に生産・再生産するための装置として機能してきました。そうした「脱植民地化」回避の仕組みのとりわけ重要な構成要素として、アメリカによる世界的な覇権構造があります。

武藤さんが指摘しているように、戦後すぐにA級戦犯とされた「岸信介が首相となり、戦後日本の冷戦への積極的参加を約束する新日米安保を推進するという異常事」は、まさに「戦後日本の脱帝国・脱植民地化の失敗を表すもの」に他なりません。そのように、「戦後日本支配集団は、米国覇権に従属的に寄り添うことで、過去から自分を遮断し、忌まわしい犯罪的な過去には口をぬぐい」ながら、同時に、『『平和国家』としての再生を演出』してきました。そのことに対して、日本国憲法を根拠として「平和と民主主義」を訴えてきたこの国の運動がどこまで自覚的であったのかが、現在、改めて強く問われているように思います。

2. 米日の植民地主義が生み出した「在日」身分と「戦後発生責任」

1952年の「サンフランシスコ講和条約」の発効による日本の占領状態の終了とともに、日本政府は、在日朝鮮人・台湾人に対して意思を確認することなく、「サンフランシスコ平和条約国籍離脱者」として、一方的に日本国籍を奪い、無権利状態に置きました。それ以後、旧日本帝国の植民地出身者の人々は、今日もなお、国籍条項によって社会生活の重要な分野で排除され、「在日」として暮らす不利益と苦痛を強いられています。そのように、戦前の日本帝国による植民地支配に由来しながら、戦後日本国家が新たに政策的・制度的に生み出してきた差別や社会的排除に対する責任を、いわゆる「戦後責任」と区別して、武藤さんは「戦後発生責任」と呼んでいます。

武藤さんは、「戦後日本は、アメリカの冷戦システムの壁の背後に隠れることによって、日本帝国が破壊と殺りくを加えたアジアの民衆の声と圧力から自分を隔離することができた」と指摘しています。そのように、戦後の日本とアジアとの関係は、はじめからひたすらアメリカの顔色をうかがうという「日米関係」でしかなかったのですが、そのような姿勢は今日まで継続されています。そうしたアジア諸国との対外的な関係以上に、「脱植民地化」の回避は、「在日」の人々の状況に象徴されるような日本国内での「戦後発生責任」の問題に、より明確に現れていると言ってもいいでしょう。

今回の報告では、「戦後発生責任」の問題をさらに補足するために、戦時中に日本の軍属として招集され、敗戦後、ソ連によるシベリア抑留で非業の死を遂げたサハリンの少数民族のウイグルタ・ニビヒの戦没者の慰霊のために、網走国定公園の天都山中腹の眺望題に建てられた「静民の碑」のことが紹介されました。また、戦後の「在日朝鮮人」への差別・排除とそれに対する「在日」の人々の抵抗の両方が鮮明に現れた出来事として、1948年4月の「阪神教育闘争」が、詳しく取り上げられていました。1947年1月、文部省は、マッカーサー司令部の方針に従い、朝鮮人学校の閉鎖を命じましたが、とりわけ、兵庫県と大阪府では朝鮮人学校を守ろうと激しい抵抗運動が繰り広げられ、同年4月の兵庫県庁前での抗議行動では学校閉鎖の撤回を合意させました。しかし、GHQがそこに介入して合意文書の破棄を宣言し、日本の警官隊と米軍の憲兵の合同で暴力的な弾圧を行いました。

朝鮮戦争当時、大阪・吹田(すいた)操車場が戦場へ軍需物資を運ぶ軍用列車の輸送拠点となっていました。1952年6月末、大阪大学豊中キャンパスでの反戦集会に参加した人々が、集会後に吹田操車場内でのデモを含む、激しい抗議行動を行うという「吹田事件」が起きています。それに対して、警官隊がデモ参加者に向かって銃弾を発砲して重傷を負わせるという厳しい弾圧が行われるとともに、デモ参加者たちは戦後始めて「騒擾(そうじょう)罪」で起訴されました(同罪については後の裁判で無罪が確定)。

「吹田事件」でのデモ・抗議行動には、「在日」の人々以外にも、多数の日本人の学生や労働者も加わっていましたが、そのように、「在日朝鮮人」と日本人が、「朝鮮戦争の即時停戦」や「軍用列車の運行中止」を求めて共に闘ったという事実を知って、今回、報告を行った者として大きな感銘を受けたということでした。

3. 沖縄をめぐる「三項関係」の解体をいかに進めるか

武藤さんが指摘しているように、今日の沖縄をめぐる関係は、単にヤマト・沖縄という二者の関係に尽きるものではなく、米国を「最強の当事者」としてそこに含む複合的なものであり、「ヤマト・沖縄の『国内植民地』支配関係が米軍基地問題をめぐって展開される」一方で、沖縄の「『国内植民地』状態からの解放という課題が日米関係の根本的関係を要求する」という特殊な三項関係が存在しています。そのような「ヤマト国家の国内植民地、そして米国の軍事植民地という『二重のくびき』を拒否し、自己決定の権利を打ち立てるために立ち上がった沖縄のピープルの力と沖縄からの怒りの声」に、こうした沖縄への「二重のくびき」を前提として自らを形成してきた戦後日本国家と社会がどう「応答」するのか。そのことが、ヤマトの私・たちに切実に問われているはずで

そのように、「沖縄をめぐる脱植民地化の課題は、日米関係と、それと不可分に撚り合わさった植民地主義そのものであるヤマトと沖縄の関係の全体を変えることを要求」するものです。武藤さんが言うように、とりわけ、沖縄の米軍基地や「安保構造」の問題については、対米関係の根本的転換が解決のための必要条件です。しかし、同時に武藤さんが指摘しているように、アメリカの覇権主義との関係を組み替えることが、そのまま、自動的に「脱植民地化」を促すわけではなく、それはあくまでも、「脱植民地化」の出発点に過ぎません。

今回の報告の中で、「あらためて『沖縄』とはどのような対象でありうるのだろうか。『日米安保の要石』や『島嶼防衛の空白地帯』。『青い海と青い空』や『癒やしの島』。国家と資本の視線に

映る、そのような常套句の範囲内で理解され、納得される場所が、はたして『沖縄』なのか」という、沖縄の文化批評家の與儀秀武(よぎ・ひでたけ)の言葉が紹介されていました。そのような沖縄をめぐる画一化された言説を越えて、ヤマトの私・たちが沖縄と「応答」をしようとする際の1つの手がかりとして、「それぞれが特異でありながら、何か共通のものを指向するという動きに孕まれたダイナミズム」を指し示す〈群島の接続〉という言葉に出会ったときに強く心を動かされたことを、今回報告を行った者は語っていました。

そうしたイメージをより具体的に描き出すための言葉として、今回の報告では、沖縄の詩人・文筆家の川満信一の「済州島から琉球諸島、台湾……と群島をつなぐコミュニケーションの輪をつくり、非武装地帯を宣言して、〈不可視の想念空間〉をひらいていく」という言葉が、紹介されました。併せて、「極東の軍事的要石としての沖縄が、どのようにして占領と植民地主義を超え、アジアを繋ぐ思想を生み出していか。〈沖縄〉を〈創る〉こと、そしてそれを〈アジア〉に〈繋ぐ〉ことを自立の鉱脈に」という、沖縄の文化／映像批評家の仲里効さんの言葉も紹介されました。

そのように、今回の報告では、武藤論文をさらに補って「戦後発生責任」がどのように残り続けているかをめぐって詳しく語られるとともに、ヤマトの私・たちが沖縄のピープルといかに「応答」・「接続」するかをめぐるイメージを喚起するような文章が、報告を行った者の思いを込めていくつも紹介されていました。

II. 「フリートーク」での論議から

以上のような「報告」の後の「フリー・トーク」では、「脱植民地化」回避や、戦後日本国家のアメリカの覇権主義への従属、さらにはアジアへの植民地支配と一体となって進展した日本の「近代化」の問題も含めて、参加者同士で活発な論議が行われました。以下、そこでの論議のアウトラインを紹介します。

1. 「日米関係が基軸」ということの「もう1つの意味」とは

- 今日の報告で詳しく紹介されていた武藤さんの論文には、「『日米関係が基軸』ということのもう一つの意味」というサブタイトルが付いている。戦後日本国家は基本的に「日米関係」を基軸に構成されているわけだが、そのことの「もう一つの意味」というのは、先ほどの報告にあったように、「脱植民地化」回避のシステムがそこに深く組み込まれているということだろう。先ほど紹介された仲里効さんとも関係の深い仏文学者・批評家の西谷修が、昨年、16世紀のフランスの人文主義者ラ・ボエシの「自発的隷従論」の翻訳を出してから「自発的隷従」という言葉がよく使われるようになってきている。日本が自ら進んでアメリカの覇権主義に組み込まれているあり方についても、それにならって「自発的隷従論」システムと呼んでもいいのではないか。そのように、アメリカの覇権主義への「自発的隷従」のシステムと「脱植民地化」回避とが背中合わせになっているということが、武藤さんの言う「もう一つの意味」ということではないか。
- 今、言われたことで間違いはないのだが、「日米関係が基軸」というのはあくまでも支配者側の言い方であって、素直に解釈すれば、「日米関係が基軸」とはつまり「『日米安保体制』が基軸」だということであり、その一方でアメリカとの関係に依存することで戦後日本国家が「脱植民地化」のプロセスを回避してきたというのが、「もう一つの意味」という言葉で武藤さんが言おうとしてい

ることだろう。

「戦後70年間、憲法9条をもつ日本は戦争をしてこなかったのに、そのことが今、安倍によって崩されようとしている」という危機意識から、現在、富山も含めて、「戦争のできる国家」へと向かおうとする安倍の策動を阻止しようとする動きが日本各地に広がっている。その一方で、白井聡の「永続敗戦論」のような、「日本は『敗戦／戦後』以来の卑屈な『対米従属』を克服して、『自立』した国家を目指すべきだ」という論議が、多くの人々に支持されるようになってきている。しかし、そのどちらにせよ、安倍の目指すような「日米関係」を基軸にした「戦争国家化」に反対しても、武藤さんが「もう一つの意味」と言っている「脱植民地」回避という視点は、全くないのではないか。

- 明治期からの日本は、外国からの直接的な圧力がどうあるかという以前に、絶対的・普遍的な規範として自分たちの目の前に突きつけられた欧米の文明に遅れを取るまいとして、自ら進んで「近代化」していったわけだが、ある論者はそうしたあり方を「自己植民地化」と呼んでいる。先ほど、沖縄を「国内植民地」状態に置いている日本国家自体がアメリカの覇権主義に隷従しているあり方に対して、「自発的隷従」システムという言い方がされていたが、「自発的隷従」システムの根底にそうした「自己植民地化」への衝動が存在しているように思う。
- 現在、安倍の策動に対する反対の声を上げる人たちは、必ずしもそのことを「反安保」という形で言っているわけではないが、今、私たちの側の「安保闘争」をどのように組み立てるべきかが問われているのではないか。沖縄以外でも、横須賀や岩国の米軍基地といった「安保実態」に対する闘いはずっと継続されているのだが、残念ながら「60年／70年安保闘争」の後には、「反安保」の闘いは途絶えてしまっている。しかし、このような状況であればなおさら、絶えず世界に向かって更新され続けている「日米安保体制」に対する闘いが必要なはずだし、そのことを運動としてきちんと表現することが必要なように思う。
- 今日の報告の最後で、「この列島を海へひらかれた島・島・島」の〈群島の接続〉へと組み替えたいという深い思いが語られていたが、それは、「安保闘争」ということをさらに越えて、この日本国家をどう壊すのかにつながることもあるだろう。今日の報告で紹介されていた沖縄の詩人の川満信一さんは、「冷戦体制」の下で大きな苦難にさらされてきた沖縄・台湾・韓国の済州島の民衆が、黒潮の流れで結ばれる者同士として国家の枠を越えた交流圏を生み出すための「黒潮憲法」を創るという大きな構想を打ち出している。私・たちは、この十数年、「日本の『構成』的解体」ということをテーマとしてきたが、そのような黒潮に洗われる島々の〈群島の接続〉に対して、黒潮から北の列島に住む私たちがどのように「接続」するのかということは、この日本国家の解体をいかに進めるかという〈問い〉と不可分なことのように思う。そのことは、武藤さんがこの日本を「他民族共生」社会に創り変えると言っていることにも重なるが、「モグラ叩き」のように安倍の攻撃が繰り返される度に対応することを越えようとするならば、そうした大きなスケールで考えることが、今こそ強く求められているように感じている。

2. 近代日本国家の軌跡をいかに「分節化」するか

- 当たり前のことではあるが、かつての日本帝国がアジアの「植民地化」を行ったからこそ「脱植民地化」のプロセスをどうするかということがあるわけで、そのような意味で言えば、「脱植民地化」

回避を問うということは、「敗戦／戦後70年」をさらにさかのぼって、植民地主義国家としての近代日本国家の歩みそのものをどう捉えるかということにまで行き着くようなことだろう。しかし、安倍政権に反対する側にしても、「日本帝国のアジアへの植民地支配は過ちだった」とは言っても、そうした近代国家としての日本の軌跡自体を問うという視点はない。現在、「冷戦体制」は解体されているのに、日本政府は依然として「冷戦」的な思考に固執して、北朝鮮や中国の脅威をひたすら言い立てながら、「辺野古新基地」建設を強行しようとしている。そうした日本帝国時代からの沖縄へ隷従を強制するあり方をいかに変えるかを考えるためにも、戦後の日本が過去の植民地主義帝国と自らをどう「切断」しているかをきちんと検証しなければならないのではないか。

- 今の意見に異論はないのだが、そこで主に2つのことが同時に言われていたように思う。「冷戦体制」がもはや存在しないのに、日本政府が「冷戦」的な思考で「辺野古新基地」建設を強行するというのは「脱植民地化」回避ということになるだろうが、近代日本国家が植民地主義帝国として形成されてきたあり方を問うというのは、「脱植民地化」回避ということだけでは言えないことではないか。そこは、やはりもう少し「分節化」して考える必要があるだろう。
- 明治になって近代的な国民国家ができたかどうかというような時期に、朝鮮半島の「植民地化」の策動や、アイヌ人の居住地域の併合、「琉球処分」等が立て続けに起きている。同時に、それは、日本国内で「被差別部落」の住民や女性、障害者などに対する「差別装置」が形成される時代でもあった。そのことを捉える際に、沖縄やアイヌの人たちの問題まで入れてしまうと少し違うように思うし、それは、先ほど言われた言葉を使えば、「自己植民地化」ということになるだろう。
つまり、欧米が「光の世界」だとすれば、日本国内には「被差別部落」といった未開の「暗黒の世界」があって、どうしたらそれを「文明開化」できるかということが日本政府の政策としてあった。そういった問題も含めて「脱植民地化」回避という概念で捉えてしまうのは、ポイントのずれた論議になってしまうのではないか。さらに、「脱植民地化」回避や「自己植民地化」といったことと併せて、先ほどからの論議では、アメリカの覇権主義に対する「自発的隷従」システムという言い方もされていた。細かな区別にこだわるように聞こえるかもしれないが、運動を組み立てようとする際にそうした言葉を使い分けることが必要に思うし、そのような「分節化」がなければ、結局、認識のあり方に見合った程度のことしかできないのではないか。
- 人類が伝統的な社会を脱して近代という時代に入ったことには、良い悪いという以前にある種の必然性があったという意味で、「近代化」ということをただ否定するだけで済むわけではない。自分たちより前に近代化した者たちに精神的に屈して自発的に「自己植民地化」ということが、日本の近代化の重要な側面としてあるが、その点では、中国など他のアジアの国とも共通する面もあるだろう。同時に、アジアへの侵略・植民地支配を通じた国家の形成といった日本の近代化特有の問題をきちんと捉える必要があるように思う。
- 「近代化」ということで言えば、日本帝国の朝鮮半島に対する植民地支配の結果として、鉄道網や港湾施設の整備等の社会的なインフラの「近代化」が進んだという一面もあった。現在の韓国の研究者にも、それによって朝鮮半島の「近代化」が進んだと唱える人たちもいて、論争を呼んでいる。もちろん、「近代化」を進めたことが、日本による朝鮮半島の「植民地支配」が免罪されることにならないのは、言うまでもない。しかし、それと同時に、「近代化」や「植民地化」、「自己

植民地化」というのはあくまでも概念上で区別できることであって、実際にはそれらが相互に混じり合って展開したということが、問題を難しくしているように思う。

3. 安倍の「野望」の目指すものは

- 安倍がアメリカの覇権主義に自ら進んで追随しようとするあり方を「自発的隷従」と捉えていいのだろうか、この間、安倍が前のめりになって安保法制の「改正」を推し進めようとする姿を見ると、白井聡の言葉を使えば「本気モード」に入っているというか、アメリカの思惑をはるかに超えて戦前の日本帝国のような「戦争国家」を目指しているように思える。それを単に「自発的隷従」という言い方で呼ぶのでいいのか、自分でもよく分からないところがある。
- 「自発的隷従」というのは、単なる「隷従」ではなく、自ら進んで隷従すると同時に、自分が隷従していることさえも意識しないでいるあり方をそのように呼んでいるわけだが、その言葉をあまり狭く捉えないで、安倍が積極的にアメリカの覇権主義に追随しようとしていることもそのように捉えてもいいとは思ふ。ただ、同時に、安倍には、武藤さんの言う「大日本帝国の継承原理」を彼の祖父の岸信介から受け継いでいるところも確実にある。安倍の「野望」として、「アメリカに負けない『世界に冠たる』国家になる」ということがあると思うが、今言われたように、そこも含めて「自発的隷従」と言ってしまっているのかは難しいところだ。
- 昔の言葉を使えば「脱亜入欧」ということになるだろうが、それと「帝国継承原理」との両方が、安倍の策動の根底にあるように思う。先ほどから「自己植民地化」ということが言われているが、一方では「世界に冠たる日本」を自称するという誇大な自己意識の一方で、欧米文明へのコンプレックスを抱いてひたすらそれに追いつこうとするといったいびつなあり方が、日本の「近代化」の内実だったように思う。そうしたあり方は、現在の安倍政権でも基本的に変わっていないのではないかな。
- それはその通りだと思うが、安倍の本音を一言で言えば、むしろ、「脱亜脱米」ということになるのではないかな。かつて日本帝国が最大限に膨張した時期のイデオロギーとして、「超国家主義」ということが唱えられていた。この場合の「超」というのはいろんな含みをもつ言葉だが、それは一方では、国家中心主義を一国的に深化させていくことであると同時に、国民国家的な枠組みを超えて国家が領土的に拡大していくということでもあるという意味で、既成の国家を超えることを目指すものでもあった。「帝国継承原理」には、そうした「超国家主義」的な野望が含まれていると考えていいように思う。そのような意味でも、安倍のあり方を「自発的隷従」ということだけで捉えるので充分かということはある。
- 近衛内閣のブレーンで「ゾルゲ事件」に連座して逮捕・処刑された尾崎秀実や、「京都学派」を代表する哲学者で敗戦の約1ヶ月後に獄死した三木清といった戦前の知識人にとって、とりわけ中国を軸にアジアと日本との関係をどのように考えるかということが、重大な関心事としてあった。そうした論議の結論は、結局、「アジア共同体」といういかがわしいものでしかなかったが、そのように、アジアをどう見るかということが戦前の日本の知識人の大きな問題意識としてあって、現在から見れば、むしろ、独自にその問題を考えようとして挫折した人たちの方に価値があるように思

う。その一方で、戦前の日本の思想的な潮流の中に「大アジア主義」というものがあって、北一輝などは、清朝打倒を目指す革命家が日本に亡命した際に支援したり、かくまったりしていたが、そのように中国革命の行方を戦前の日本の知識人たちは注目し続けていた。

しかし、日本の敗戦による植民地の喪失によって「脱植民地化」という課題が不問に付されると同時に、そうしたアジアに対する同時代的な関心を持ち続けてきた流れも敗戦によって中断してしまったように思う。言うまでもなく、アジア・太平洋戦争に勝利したのは中国や朝鮮なのだが、「敗戦／戦後」の時間の中でそのことを踏まえながらアジアとの関係をどうするのかということ、日本の私たちは考えてこなかった。安倍が中国や北朝鮮による軍事的な危機を唱えながら、「戦争国家」を目指そうとしているという現在の状況は、そうした思想的な意味でのアジアへの関心を失ってきたことの一つの帰結でもあるだろう。

- 同じ絵が見方によって二人の少女の横顔に見えたり、花瓶に見えたりするという「だまし絵」があって、どちらかを見ようとすれば、他方は見えない仕組みになっている。「日米関係」と「脱植民地化」回避というのも同じようなことがあって、互いに「背中合わせ」になっていながら、どちらか一方を見ようとすれば他方は見えないようになってしまいがちだが、今日の集いの論議では、それらを一つながりのものとして捉えるための手がかりを得ることができたように感じている。
- そのように状況を大きく捉えることができるかどうかは、結局、そのためのイメージやビジョンの「力」を自分たちがどこまでもっているかということであって、それは社会科学的な言語だけではそうはならない。例えば、今日の報告でも、自分たちをアジアに向かって開く際のイメージとして〈群島の接続〉ということが語られていたが、そのように大きなビジョンや「構想力」を自分たちの中にもつことで初めて、入り組んだ構図を明確に捉えることができると同時に、さらにその〈向こう〉を見通すことができるのではないかと思う。